

論 文

## 妖怪の活躍時間

小林賢章

同志社女子大学  
表象文化学部・日本語日本文学科  
特別任用教授

## About the Active Time of the Apparition

Takaaki Kobayashi

Department of Japanese Language and Literature,  
Faculty of Culture and Representation, Doshisha Women's College of Liberal Arts,  
Special Appointment Professor

現行の古典の注釈書類を見てみると、妖怪がこの世に現れるのは夕方の薄暮の時間帯とし、この世から去って行く時間は朝方の薄暮の頃と指摘するものが多い。この結論に注釈書類が至りついたのは、益田勝美の「黎明」論<sup>[1]</sup>によると考えられる。結論から述べるならば、益田の意見は間違いである。いや、より正確に言おう。日本の妖怪は確かに夕方薄暮の時間に現れ、朝方薄暮の時間に退場するものもあるが、そうではなく、当時の時代の夜中と意識されていた時間帯が妖怪の活動時間であったというのが、本稿で述べようとするところである。

どうして、そんな間違いが古典文学の解釈の世界に起きたのであろうか。「黎明」論では、例えば暁は黎明の頃としているが、私には暁は午前三時以降と考えている。暁の開始時間は、冬はもちろん、夏であろうとも真つ暗であることは確認されなくてはならない。益田は「黎明」論で暁という時間帯を薄暮と捉えた。その点が益田の論の問題点の第一なのである。

少し説明を加えよう。この問題は暁の語史という視点を持たなくてはならない。現今暁は太陽の出る頃と理解されている。暁を午前三時から午前五時の間と奈良・平安時代人が理解していたは私見である。とするとその変化のあとを跡づけねばならない。もちろん、論者にはその力はない。

ただ、暁の開始時刻の変化もそれに起因する時刻法の変化について、一言駄言を加えておく。中世までと江戸時代からとで時法に変化があったことはよく知られた歴史事実だ。いうまでもなく、定時法から不定時法への変化だが、ここで、一時間の時間の変化が起きていることはいままであまり指摘されてこなかった。この点をまとめておくなら、例えば、午の刻は中世までは、午前十一時から午後一時であり、江戸時代には正午から午後二時までの時間を示すことになる。午の刻以外の時間は午の刻に準じて考えればよいのである。

なぜ、ここに駄言を加えたかという点、主に高校生の使用する国語便覧や古語辞典などで、「午の刻午前十一時から午後一時（一説に、正午から午後二時）」などの記述が見られるからである。この記述は正しい。ただ、「一説に」の部分は江戸時代になると記述を訂正しなくてはならないのである。そこまで、朝の開始時刻は午前三時だったが、不定時法の採用以降、午前四時になっているのである。<sup>[2]</sup>

ここで述べていることは、定時法と不定時法の時刻の取り方に一時間の時刻差が生じるのであって、定時法と不定時法が冬や夏に昼の時刻と夜の時刻の一時間という時刻の取り方に、例えば、夏なら昼が長く夜は短い、冬はその逆といったことを

いつているのではない。

論を飛躍させよう。「お江戸日本橋七つ立ち」と歌い出す「お江戸日本橋」という歌がある。この「七つ立ち」は午前四時(ころ)の出發である。ところが、中世以前に七つ立ちと言えば、午前三時の出發になるのであった。もちろん、「午前四時(ころ)」の「ころ」は不定時法による時刻の差異を意味して使用しており、中世以前の時刻法は現在と同じ定時法であるから、原則、「ころ」と付けなくともいいことは問題ない。

## 二

前節の一時間の時間の繰り下がりについて述べたのは、各時代の文学作品や歴史文献を読む時にはその時代の時間意識を知っていないといけないと言った。話を平安時代に戻そう。そして、本稿では、だいたい鎌倉時代までの作品を検討する。平安・鎌倉時代の文学作品を読むときのヨナカの意識・理解について述べておかなければならない。

当時、時間の区分けについては寺院の撞く六時の鐘が大きな意味を持っていたというのが、私の推定である。子・丑・寅などの十二支による時刻表現はそれぞれ二時間の時間帯を意味していた。それに対して六時の鐘は、戌の刻(初夜)、子の刻(中夜)、寅の刻(後夜)、辰の刻(晨朝)、午の刻(日中)、申の刻(日入)に鳴らされていたことが知られる。六時の鐘であるから、一日二十四時間を六で割るとその間は四時間ごとになる。その四時間ごとに名前が付けられていたという考えである。

ここで扱うヨナカという時間も、すでに、大野晋によって、ユフベ→ヨヒ→ヨナカ→アカツキという連続する時系列が示されている。私に二つの点をこの時系列に付け加えたい。

- ①それぞれに時間が対応していること。ユフベの終了時点は午後七時。従って、ヨヒの開始時点は午後七時、終了時点は午後十一時。従って、ヨナカの開始時点は午後十一時。ヨナカの終了時点は午前三時。従って、アカツキの開始時点は午前三時となるのであった。

ヨナカという時間帯は午後十一時から午前三時までの間となる。

- ②ヨナカと同じ表現にヨハ・ヤハンが存在すること。つまり、午後十一時から午前三時までの時間帯はヨナカともヤハンともヨハとも呼ぶということである。

もちろん、ヨハは和歌の世界で雅語として使用されることが多く。ヨナカは俗語の世界で使用されることが多いというように、各語はそれぞれの性質は持っている。本稿では、ヨナカ・ヨハは、もちろん、「夜半」などと表記されそれをどう読んでいいかわからないときも、ヨナカの用例として扱えるという利便性が、右の事象には生じるのである。

あえてもう一つ、本稿の立場を加えておくなら、従来、時間表現にはころびが多いとされた平安・鎌倉時代の作品は、現在の読者の方の間違った理解に機縁しているということである。動詞のアクは夜が明ける意味ではなく、午前三時になる、日付が変わる意味であったことは繰り返し述べた。

それに、時間表現は、子の刻以下の十二支による時間表現だけでなく、いろいろなものがあつたことがわかってきた。本稿のヨナカなどももちろん時間表現だが、ほかに、「夜が更けて」なども、意味するところは、ヨナカになるという意味だった。フケユク(更け行く)もヨナカの時間を意味し、アケユク(明け行く)はアカツキの時間を意味していた。「夜が更けて」の動詞を含むフケユク、アケユクなどの複合動詞も時間を表現していたのだった。

## 三

本稿で、主にその主張を反論することになる益田勝実の「黎明」論では暁を薄暮と捉えて立論していたが、暁は原則暗い時間帯であり、薄暮の時間帯に異界とこの世界との登場人物の交替があるという論は成立しないと考える<sup>(3)</sup>。

ここでは、二つの有名な用例から、ヨナカの開始時刻が妖怪の活動時間の開始時間であることを述べる。

ただその前に述べておかなければならないことは、本稿で妖怪というときは、この世ならざるものを全て含むことを断っておく。人が死して現世に再び現れる幽霊と呼ぶのが普通なもの。異形な姿の鬼と通称されるもの。人に取り付いて現れる憑霊など。そんなこの世ならざるものは、その全てを含む。

一つ目は、『竹取物語』の月よりの使者の登場場面である。かぐや姫は翁に離別の心中を述べ、翁が返事をしたあと、

かかるほどに、宵うちすぎて、子の刻ばかりに、家のあたり、昼の明さにも過

ぎて、光りたり。

と、月よりの使者の到来が描かれる。「宵うちすぎて」は午後十一時も過ぎての意味である。「子の刻ばかりに」の「ばかり」については少し説明を加える。この場合で言えば、「子の刻に」と「子の刻ばかりに」の対比である。「子の刻に」の場合には十一時過ぎにの意味になり、子の刻が始まって直ぐにの意味になる。「子の刻ばかりに」となると、開始時刻とは限定されず、子の刻と呼ばれる時間帯にの意味になる。その問題に関わらず、月よりの使者は夜中と呼ばれる時間に出現している。

次は、『源氏物語』夕顔の巻の物の怪出現の時間である。ここは、「宵過ぐるほど、すこし寝入りたまへるに」と『竹取物語』より短く表現される。この物の怪の出現も宵(午後七時から午後十一時)を過ぎた時間とわかる。

右二例から、妖怪の出現する時間の開始時刻は午後十一時以降夜中の時間と考えるとよいであろう。これほど有名な用例があるのに、そのことが気づかれなかったのは、宵という語は漠然と夜の始まり頃と考えられていたためである。宵を午後七時から午後十一時の時間と考えると、ここで述べる事態は誰の目にも見えるものなのである。

こうした類例は多数ある。例えば、『古本説話集』二七「河原院事」では、融の左大臣がかつて住んでいた河原の院に幽霊となつて出現する話である。その幽霊の出現時刻は「夜中ばかり」であった。また、この同話が『今昔物語集』二十七―二、『宇治拾遺物語』下―五一にもある。『今昔物語』は「夜半許二」であり、『宇治拾遺物語』も「夜中ばかり」である。幽霊の出るのがヨナカであることはわかる。類例は『今昔物語集』の中に多い。ただ、ヨナカを過ぎると活動時間が終わる用例は意外と少ないので、以下その点も検討に加える。

#### 四 用例の検討

先に、『竹取物語』と『源氏物語』や『古本説話集』などの用例を上げた。本節では、『大和物語』、『大鏡』それからやや時代は下がるが、『今昔物語集』を検討する。さらに、鎌倉時代に入って、『発心集』、『宇治拾遺物語』、『海道記』までの用例を検討する。

##### 四一 『大和物語』百四十七『生田川』

本話は有名な妻争いの説話である。そして、その最終段はその後日談が語られる。

三人の墓の近くに、ある男が泊まった夜のことである。どこからか人が争う音が聞こえるが、そんな様子は近辺に見えなかった。不思議に思いながら眠りにつくと、夢に血まみれの男が現れ、旅人の持つ腰の刀の貸与を願う。その男に刀を貸し与える。そんな夢から目覚めると、自分の持っていた佩刀はなくなっていた。

しばらく争う音が聞こえた後、夢の中の男が眼前に現れ、積年の恨みを晴らしたと告げる。男は妻争いの片方の当事者であった。妻争いの後、死んだ三人の遺体は並んで埋葬された。その相手の男には家族が、弓、胡籙などとともに、太刀も埋葬したが、夢に現れた男には武器を同葬しなかった。そのために、戦いの苦しい日々を送っていたことも含め、今までの事件のあらましを語る。その話を聞くことが終わる様子は次のように語られる。

いとむくつけしと思へど、めずらしきことなれば問ひ聞くほどに、夜もあけにければ、人もなし。朝に見れば、塚のもとに血なども流れたりける。太刀にも、血つきてなむありける。

が、その段の末尾部分の描写である。

この部分について、『新編古典全集』には、「すぐ前の「夜もあけにければ、人もなし」と「朝に見れば」は、重複した文である。「夜もあけにければ」の方は、夜のがわからの話の進行によって語られたものであり、「朝に見れば」の方は「朝」が夜中に何かがあったその翌朝の意で、朝になってしまった立場で、夜中のことを思い出すような意識の転換が行われている。」の頭注が付けられている。さらに、この部分には、「夜も明けてしまった。見ると、人もいない。朝になって見ると、塚のあたりに血などが流れていた。太刀にも血がついていた。」と脚注として口語訳がついている。

当然のことだが、この注釈では「夜もあけにければ」は今日の夜明けと理解している。そして、その時刻は「朝」であるとも理解していることがわかる。こうした理解が当該部分の一般的な理解であるから、その代表としてこの注釈を引用した。私解を示そう。「夜もあけにければ」は午前三時になるとの意味である。それに後接する時間帯が朝だった。

「夜もあけ」のような夜が主語で、明くが述語の組み合わせを、私に、「ヨノアケ表現」と読んでいる。意味は午前三時になる、日付が変わる意味だった。午前三時になると意識してもよい表現だったのである。

とすれば、生田川の幽霊は午前三時に姿を消していることになる。

## 四一三 『大鏡』 師輔の伝

これは師輔が百鬼夜行に逢ったが、尊勝陀羅尼を唱えることで難を逃れる話である。まず、『大鏡』である。

この九条殿は、百鬼夜行にあはせたまへるは、いづれの月といふことは、えうけたまはらず、いみじう夜ふけて、内より出でたまふに、

この後、百鬼夜行に遭遇するのだが、その時間は「いみじう夜ふけて」であることがわかる。「夜ふけて」は夜中になることを意味している。ここは、それに「いみじう」が付いているから、夜中の後の方の時間帯であることがわかる。夜中には子の刻と丑の刻が含まれるが、「いみじう」がついているから、丑の刻と考えていいであろう。夜更けてといみじう夜更けての対立は、夜中と夜中ばかりの対応に似ていると考えられる。

さて、百鬼夜行に逢った師輔は、家来に牛車の回りを囲ませ、「先を高く追へ」と大きな声を出すように要求する。自身は簾をおろした牛車の中で、「御笏とりて、うつぶさせたまへる気色」と慎んだ様子を取る。

そんな様子で、「時中はかりありてぞ、御簾あげさせたまひて」と、一時間たつと百鬼夜行が退散したことが語られる。夜中の時間帯は四時間しかない。そのうちの一時間を経過させようとすると、午前二時には百鬼夜行にあつていないといけない。「いみじう夜ふけて」はここでは、丑の刻になってくらの表現だったのであろう。

なおこの話の類話は、『打聞集』、『古本説話集』、『今昔物語集』などに見えるが、時間表現が、「夜深ク行カセ給フ」(『今昔物語集』巻十四一四二)などと見えるだけで、時間を確定はできない。『宇治拾遺物語』は「夜中ばかりにやなりぬらん」と思ふ程に(巻一十七)とあって、夜中の事件であることがわかる。

## 四一三 『今昔物語集』

次に、『今昔物語集』中の用例の検討をする。『今昔物語集』はヨナカに妖怪が出現するのは多数有り、そのことはほぼ間違いない。ただ、妖怪の活動停止時間の記述は意外と少ない。ここではそうした用例、あるいは、そうだと推定される用例を検討する。

## 四一三 一 『今昔物語集』 卷十三 一 『修行僧義睿値大峰持経仙伝』

修行僧の義睿が熊野から大峰を通り金峰にぬけようとして道に迷う。その時一つの僧坊を見つけて、一夜の宿を乞う。僧坊の主人はこの宿からの退去を勧めるが、義睿は是非にもと宿を乞う。宿の主人は泊まるのなら、体を動かさず、声を出さなと言う。

この後、異類の登場となるが、その登場の時間には少々問題があるので、異類の退場の時間を考える。多くの鬼神の中の一人が、義睿の存在を感じて、

此ノ中ニ第一ノ者ノ云ク、「今夜怪キカナ。例ニモ非ズ人間ノ氣有ル輩有り。誰人ノ来レルゾ」ト云ヲ聞クニ、義睿心迷ヒ身動ク。而間、聖人発願シテ法花経ヲ誦スル事終夜也。曙ル程ニ成ヌレバ、廻向ジテ後、此ノ異類ノ輩ラ皆返リ去ヌ。

右文中「聖人」はこの宿の主人である。「心迷ヒ身動」いた義睿を聖人が法花誦して助ける様である。その聖人の法花誦は「事終夜也」と描写される。ヨモスガラの終了時点は日付変更時点であることは既に述べた。

さらに、傍線部「曙ル程ニ成ヌレバ、廻向ジテ後、此ノ異類ノ輩ラ皆返リ去ヌ。」とあるが、動詞アクは午前三時になることだった。聖人の法花誦が「終夜」だったのだから、その直後(午前三時ごろ)に鬼神達は退出していることになる。

ちなみに、『大日本国法華経験記』では、「聖人発願して法華経を誦し、天曉の時に至る。廻向し已りて後、集会の大衆、渴仰礼拝して、各々分散せり。」(上十一)とあり、『発心集』では、「暁に及びて廻向する時、此の諸の輩、敬ひ拝して去りぬ。」(巻三十三)とある。これらのほうが、暁の時間、それも、暁の開始時点近くで鬼達が帰って行ったことがわかる。

さて本説話の鬼神の登場時間は、「初夜ノ程ニ」とある。初夜とすると午後七時である。もしこれが正しいとすると薄暮の時間に鬼神が現れた根拠になりそうである。本説話とほぼ同説話である『法花験記』には「初夜の時許に」とある。ところが、『発心集』では「やうやう夜ふくる程に」と夜中の時間を意味していると思われるのである。

この説話だけが鬼神の登場時間が非常に早いとは考えにくい。さらに、『法花験記』や『今昔物語集』の記述から考えると、やはりこの「異類ノ輩」は初夜ノ程に現れたのであろう。逆に『発心集』の記述はどうなるのであろう。これも単純な記

述のミスとは考えられない。

「異類ノ輩」の登場時間は二つあり、時代的には初夜が古く、夜中が新しいと予想できるのでないか。

#### 四一三二『今昔物語集』卷十三・三十四「天王寺僧道公誦法花 救道祖神語」

天王寺の僧道公の話である。紀伊の国美奈部郡での話である。ある大きな樹の下で宿ったとき、「夜半許ノ程ニ」馬に乗る人が二十騎ほどやってきて、道祖神に向かつて「一緒に出かけよう」と呼びかけると、道祖神は今晩は「行歩不叶ズ」と返答する会話が聞こえた。翌日（「夜暎ヌレバ」）道公が樹の根方を調べると道祖神の絵馬があり、それも女の姿は欠け、男の道祖神の乗る馬の脚の部分が破れていた。この部分を糸でつないでやり、その夜を迎えた。「夜半許ニ」前後と同じように、多くの馬に乗る人がやって来る。この夜は昨夜と違い、男の道祖神は出かけていった。続いて「暎ニ成ル程ニ、道祖神返来ヌ」と道祖神が暎に帰ってくるのが書かれ、道祖神と思われる翁が礼を述べる場面になる。

この道祖神の活躍時間は、夜半から暎までであることがわかる。それも、「暎ニ成ル程ニ」つまり、暎の開始時点午前三時頃に、道祖神は帰宅したことがわかる。とすれば、道祖神の活躍時間はヨナカの時間帯であることになる。

#### 四一三三『今昔物語集』卷二十七・三十一「三善清行宰相家渡語」

「宰相三善ノ清行」と言う人がいた。諸方面の知識が深く、陰陽道の面まで究めていた。それなのに、五条堀川の辺りの旧屋を買った。十月二十日ほどにその家を出かけてみるとひどく荒れた様子であった。晝を一間に敷かせ、部下には「明日参レ」と帰宅させ、一人そこに寝についた。

「夜半ニハ成ヌラム」と思う頃天上の組み入れがこそそ音がするので、見上げると、組み入れごとに顔が現れていた。じっとしていると、その顔は消えた。次に、身長が一尺程の者が四、五十人馬に乗って西から東に庇の間を通った。

次には、塗籠の戸を三尺ばかり開けて、座った丈が三尺ばかりの美しい女が現れる。美しい人と見ていると、去ろうとする。その時顔を隠していた扇を取ると、鼻は赤いうえに、口の両脇から四、五寸もあろうかと思える牙が見えた。その後塗籠に姿を隠す。

次の表現は以下のようなものである。

宰相其レニモ不騒ズシテ居タルニ、有明ノ月ノ極テ明キニ、木暗キ庭ヨリ浅黄上下着タル翁ノ平ニ揺タル文挾ニ文ヲ指テ、目ノ上ニ捺テ平ミテ橋ノ許ニ寄来テ跪テ居タリ。

右の文中、傍線部「有明ノ月ノ極テ明キニ」に「有明の月」と表現される。有明の月は午前三時を過ぎて出ている月であった。となると、色々なお化けが現れているうちに、暎の時間になった、となるのである。

おそらく、この文を捧げた男もこのお化け達の仲間であるのだが、午前三時を過ぎると人間の姿となるのであろう。

ただ、この節には一つの問題がある。右の宰相と翁の「有明ノ月」の時間の問答の後、「夜暎ヌレバ、宰相ノ家ノ者共迎ヘニ来ヌレバ」と「夜暎ヌレバ」と午前三時に家来達が迎えに来ていることである。前夜宰相は家来の者に先に、「明日参レ」と命令していたから、「夜暎ヌレバ」すなわち午前三時に迎えに来るのは当然のことだった。とすると、宰相がこの家の昔の持ち主との「有明ノ月」の下での会話の時間が同じ時間に成ることだった。そこに、少しの矛盾があることは認めておく。

有明の月が時間表現である以上、ここでの化け物達もヨナカの時間に出現しているのがわかる。

「夜半許ニ」や「夜更けて」や「夜暎て」の前などがヨナカと呼ばれる時間になることを表している、この『今昔物語集』の卷二十七だけでも、二話、三話、七話、九話、十話、十二話、十四話、十五話、十六話、十八話、二十話、二十二話、二十四話、三十話、三十一話（当段）、三十三話、三十五話、三十六話、三十八話ではいわゆるヨナカの時間に妖怪が登場している。卷二十七（「霊鬼」の巻）全話四十五話のうち十九話である。

この事実だけで妖怪の活躍時間はヨナカであると言える。

#### 四一四『発心集』の場合

『発心集』の卷四・一「三昧座主の弟子、得法華経験の事」は、『今昔物語集』卷十三・一と同内容なので省略する。

#### 四一四一『発心集』卷五・四「亡妻現身、夫の家に帰り来たる事」

片田舎の男がいた。長年仲むつまじかった奥さんが産後の肥立ちが悪くてなくな

る。葬式も済ませ、法事も済ませていたが、何とか姿をもう一度見たいと思っていると、ある時、「夜いたう更けて」妻が寝所に現れる。親しく語り合い、枕を交わす。女は「暁起きて、出でさまに」と帰って行く様子が描かれる。このなくなった女は、ヨナカに男の所にやって来て、暁に帰っている。

#### 四一五 『宇治拾遺物語』

##### 四一五―一 『宇治拾遺物語』巻一・三「鬼に瘤取らるる事」

これはいわゆる「瘤取りじいさん」の話である。鬼が瘤を取って帰る場面の時間は、「暁に鳥などなきぬれば」と表現される。冒頭に紹介した益田勝美「黎明」ではこの表現を大きな根拠として、鬼の帰る時間は黎明のころだとしている。既に、私論で多く述べてきたように、アカツキは午前三時以降の時間帯であり、原則まだ暗闇の時間である。むしろ、ここまで『今昔物語集』などの用例を根拠に述べてきたように、この鬼の帰宅時間も午前三時すぎであることになる。ヨナカの終了時点である。

##### 四一五―二 『宇治拾遺物語』巻十二・二十二「陽成院ばけ物の事」

陽成院が退位の後お住みになったのは、いわゆる二条院であった。その邸宅の中の釣殿で番の者が寝ていると、「夜中ばかりに」翁が現れる。その翁は、鬼と変じてこの番の男を喰ってしまう話である。ここで、鬼はヨナカに現れている。

##### 四一五―三 『宇治拾遺物語』巻十二・二十四「一条棧敷屋、鬼の事」

これはある男が一条棧敷屋に泊り、傾城と共寝する話である。この話でも、鬼は「夜中ばかりに」現れている。

#### 四一六 『平家物語』の場合

##### 四一六―一 『平家物語』巻四「鶴」

源三位頼政の話である。頼政が鶴を退治する話がこの段の中心の話である。鶴の本節には二つの鶴の話が登場する。それぞれの鶴の登場時刻は、一つは本稿の視点を補強する表現がとられ、今一つは、本稿の対立的な視点を補強する話柄であった。

前話は近衛の院のご在位の頃、毎晩発作を起こされた話である。その記述は、「御悩は丑の剋ばかりであるけるに」と始まる。頼政が退治した妖怪は、「頭は猿、むくろは狸、尾は蛇、手足は虎の姿なり。なく声鶴にぞ似たりける。」と表現される。この妖怪の登場時間は午前一時ごろであることがわかる。

#### 四一六―二 『平家物語』巻六「嗔声」

越後の国の住人、城太郎助長が木曾追悼に義仲追討に赴く場面である。

木曾追討のために、都合三万余騎、同六月十五日門出して、あくる十六日の卯刻に、すでにうったたんとしけるに、夜半ばかり俄に大風吹き大雨くだり、雷おびたたしうなつて、天霽れて後雲井に大きな声のしはがれたるをもつて、「南閩浮提金銅十六丈の盧舎那仏、焼きほろぼし奉る平家の方人する者ここにあり。召しとれや」と三声さけんでぞとほりける。

と描写される。この後黒雲は「あくる十六日卯刻に」出立した城の太郎の頭上を覆う。茫然自失のうちに落馬し、輿に載せられて帰宅するが、三時のうちに死亡することになる。

「嗔声」も「夜半ばかり」に出現したことになる。

#### 四一七 『海道記』の場合

最後に、『海道記』に出現する妖怪を検討する。旅行記は終盤江ノ島にある神社の話である。

法師は詣でずときけば、その心を尋ぬるに、「昔、この辺の山の山寺に禅侶ありて、法花経を誦誦して、夜を明かし日を暮す。その時、女形出で来りて、夜毎に聴聞して、明くれば忽然として失せぬれば、その行方を知らず。(66頁)

と話は続く。この話もこうした話の典型の一つだが、毎晩現れた女は、「明くれば忽然と」姿を消すのである。従来、こうした動詞「明く」は、夜が明けると考えられてきたが、日付が変わる午前三時になる意味であると私説を展開してきた。ここもその例である。

#### 五

以上のように、妖怪が夜中に現れて暁(午前三時)に消えていくという話は古典作品中に多数あるのである。

ここで、話は冒頭の益田勝美「黎明」に戻る。益田は、夕方でも朝でも薄明のころがこの世とあの世の交替時間だと説いた。それも、明け方については「瘤取りじ

いさん」の話(『宇治拾遺物語』・本稿四一五一参照)中の「暁」から、暁がその時間だと説いたのである。

本稿中、先にも述べたが、暁は平安時代は午前三時から午前五時の間と考えてよい。つまり、暁はほぼ暗い時間となる(春から夏の暁の終わりの方は除く)。中世に入っても、始まりの時間は守られていたようで、終わりの時間が崩れ、伸びていったと考えられる。

つまり、益田の薄暮の時間帯があこの世とこの夜の交替時間であると言う主張は、「瘤取りじいさん」の暁を根拠とする主張には首肯しえないのである。

それでは、益田の主張は認められないのかというところではない。本稿では薄暮交替の用例を意図的に避けてきたが、そうした用例も『今昔物語集』の用例を中心に多く見られるのである。

四一六一『平家物語』巻四「鵠」の用例に戻ろう。ここでは、頼政の近衛の院在位の頃の鵠退治の話を用例として採用した。その説話は「鵠」の話の半分で、後半には頼政のもう一つの鵠退治の話が載る。

その話は「去る応保のころほひ」で始まる。その日時については、「比は五月廿日あまりのまだよひの事なるに、鵠ただ一声おとつれて、二声ともなかざりけり。」と記述される。五月の宵のことであることが述べられる。

また、以下の話は頼政が鎗矢で鵠を射るのだが、その後院の御感のかずけ物を取り次いだ大炊御門の右大臣公能公が、「五月闇名をあらはせるこよひかな」と声を掛けると、「たそかれ時も過ぎぬと思ふに」と連歌したことが語られる。「たそかれ時」は午後五時から午後七時までの時間帯を言い、宵は午後七時から午後十一時の時間帯を言う。前の事実の記述と同じこと、宵の時間帯にこの出来事が起こったことが語られる。宵の刻は、「目さすとも知らぬ闇ではあり」と書かれているが、広く薄暮の時間帯と考えてよいであろう。

ここで振り返ってみると、四一六一と項立てして論じた鵠は夜中の丑の刻に現れ、後の鵠は宵の刻(薄暮)に現れていることがわかる。妖怪の活躍時間(または出現時間)はやはり二つあるのではないか。

## 六

ここまで、妖怪の活躍時間が夜中であると考えてきた。しかし、益田の立場、つまり、妖怪の活躍開始時点は夕方の薄暮の時間、活躍の終了時点が朝方の薄暮の時間という立場を支持する妖怪の出現、退場の話がないのかというところ

うではない。たしかに妖怪の活躍にはそうした面も存在するのである。

例えば、『日本霊異記』上巻第三話の「電の意を得て、生ましめし子の強力在りし縁」には「夜半」に一度出現しその時は退場した鬼の二度目の退場時間が、

鬼、亦後夜の時に来り入る。即ち鬼の頭髮を捉へて別に引く。鬼は外より引き、童子は内より引く。彼の儲けし四人、慌れ迷ひて、蓋を開くことを得ず。童子、四角別に鬼を引き依り、灯の蓋を開く。晨朝の時に至りて、鬼己の頭髪を引き剥がらえて逃げたり。

と二度目の登場が「後夜の時」(午前三時)、その退場時刻が「晨朝の時」(午前七時)であると記される。鬼は童子に無理に止められていたのだが、その登場時刻が後夜の刻であるとする、普通夜中に登場することが多い鬼よりやや登場時間が遅いことから判断して、この鬼は薄暮の時間に退場したと考えてよからう。

先に、『今昔物語集』を取り上げたときに、巻二十七を問題とした。その巻が「霊鬼」の描かれる巻だったからである。そこに出現する鬼は確かに、夜中に現れ、夜中の終わる暁の時間がその退場時間と言う意識をもって描かれていた。

ところが、巻二十七の第四話「冷泉院東洞院僧都殿霊語」、第十七話「東人宿川原院被取妻語」、第二十九話「狐変人妻形来家語」、第四十一話「高陽川狐変女乗馬尻語」では、妖怪の登場時刻が「夕暮方」と表現される。夕暮方は午後五時過ぎを意識した時間表現だった。夕方の薄暮の時間は午後五時ころを意識していたことになる。

その先のことに議論を進める前に、一つの事実を確認しておかなければならない。四一三節で『今昔物語集』中の妖怪を検討したとき、巻二十七の四十五話のうち十九話で妖怪が夜中に出現していることを述べた。残りのうち、四話で夕方に妖怪が出現しているのだった。この事実を見て、妖怪の登場時間、退場時間は夕方、あるいは、朝方の薄暮の時間と考えて、それで済みとなるであろうか。

『平家物語』の「祇王祇女」の話の終わりの箇所。嵯峨野に隠棲する母刀自と祇王祇女姉妹の所に仏御前が尋ねてくる場面がある。そこで、親子三人の様子は、

たそがれ時も過ぎぬれば、竹の網戸を閉じふさぎ、灯かすかにかきたてて、親子三人親子三人念仏してゐたる処に、竹の網戸をほととちたたく者出て来たり。其時尼ども肝を消し、「あはれ是はいふかひなき我等が、念仏して居

たるを妨げんとて、魔縁ま縁の来たるにてぞあるらむ。响だにも人もとひこぬ山里の、芝しばの庵いほりの内なれば、夜ふけて誰たれかは尋ぬべき。

と描かれる。この時間帯は、「夜ふけて」いることがわかるし、その時間帯に訪れる物は魔縁であると認識していたことがわかる。

結論を急ごう。妖怪の類いは確かに夕方と朝方の薄暮の時間帯に出現退場するという性格を持っていた。この性格は、益田勝美の言う通りであった。その一方で、夜中の時間に出現退場するという性格も妖怪は持っていたのである。

この二つの時間は当時の人々にどのように理解されていたのだろうか。夜中の時間、とくにその終了後の時間帯は暁と呼ばれた。午前三時から午前五時がその時間帯だった。その終了時点では明るいこともあるが、少なくともその開始時点では、一年中真つ暗であった。

ではなぜ妖怪は真つ暗な時間に退場したのであろうか。その時間を天皇を中心とする貴族社会が作り出していたからと予測することはたやすいことであろう。

本来、朝夕の薄暮を登場・退場時間としていた妖怪も、天皇制の時間区分の時代にそのルールに従うようになった。これが私の本稿の結論である。

別の視点で、朝夕の薄暮を登場・退場時間ととらえる考えと夜中を妖怪の活動時間と考える二つの考えを対比的にとらえるなら、前者が古く後者が新しいとも言える。この時代に妖怪が夕方や朝方に現れると、薄暮の時間が妖怪の登場時間・退場時間だという注釈が付けられているのをよく目にする。確かにそれは正しい一面を持つていた。ただ、それはあくまでも一面であり、全てではない。むしろ、この時代夜中が妖怪の活動時間であったという常識を失わせる側面を強く持っているのであった。

特にそれが強く表れるのは、朝方の薄暮の時間（退場時間）についての注釈であった。平安時代・鎌倉時代の暁は明るくない。それなのに、暁を薄暮ととらえるとらえ方が行われるからであった。

妖怪の登場・退場時間には二つの考え方があったのである。

## 注

- (1) 益田勝美「黎明」(『火山列島の思想』一九七〇年 筑摩書房所収)  
 (2) 山口隆二『日本の時計』(一九四二年 日本評論社)が参考になる。

- (3) 拙著『アカツキの研究』(二〇〇三年 和泉書院)

私説については、本書と次の注引用の拙著に詳しい。

- (4) 拙著『「暁」の謎をとく』(二〇一三年 角川教育出版)